

監修の序

ビジュアル実践リハ「整形外科リハビリテーション」の初版が発刊されてから12年が経過した。世界第1位であるわが国の健康寿命はさらに約2年延伸したが、高齢化を背景に依然として平均寿命とは10年前後の差が存在する。健康寿命の短縮要因、すなわち要介護の原因として、認知症、脳血管疾患に続くのが骨折・転倒であり、要支援の最多原因でもある関節疾患とともに、運動器障害の問題解決が健康寿命延伸にとって必須であることに変わりはない。

一方、医学・医療は日々進歩する。運動器領域においても、ロボット支援下の手術や人工知能を利用した診断の試みなど最新技術の応用や、再生医療などが進んだ。また、既存の技術の利用・応用が運動器領域で進んだものもある。一例として運動器エコーがあげられ、視診・触診を補う非侵襲的診断法の1つとして、医師のほか療法士にも広まりつつある。

これらの状況を勘案し、第2版ではいくつかの項目が追加された。まず、序章に運動器エコーを含めた画像診断の項目が加わった。各論では、手術適応とはなりにくくても日常よく遭遇する疾患（過用やスポーツによる各種の関節周囲疾患）など、数項目が追加された。カラーの図表や写真、箇条書き、「POINT」や「Do！/Don't！」による要点整理といった特徴は踏襲されている。特に「Don't！」には、教科書的な禁忌だけでなく、筆者らの豊富な臨床・指導経験に基づいた、ついやってしまいがちな落とし穴も載せられており、本書の価値を高めていると思う。実用的な書をめざし、手技の感覚的なコツなどもできるだけ含めていただいた。一方で、初版が多くの養成校で教科書として利用していただけているとの状況もふまえ、わかりやすさを損なわない範囲で用語の正確性には極力配慮した。

本書を見ると、病院では日々手術が行われている整形外科ではあるものの、多くの運動器障害の治療の柱は運動療法であることが改めてわかる。手術後のリハビリテーション治療に限らず、多くの運動器疾患・外傷に対する第一選択としての理学療法の実際が盛り込まれているのが本書である。本書が日常の運動器リハビリテーション診療やその指導の一助となり、ロコモティブシンドロームの治療・予防はもとより、日常的な運動器障害の改善につながり、多くの患者さんの助けになることを願っている。

2024年11月

神野哲也